

# テネシー・ウィリアムズの初期 一幕劇に関する覚え書き(1)

加 藤 芳 慶

## 1

テネシー・ウィリアムズは、習作時代、寄る辺ない老嬢の悲哀を数篇の一幕劇のうちに描いている。そして、後に発表される多幕劇で、さまざまに形を変えながら、根強いテーマの一つとなる夢と現実の相克がすでに素描されていて興味をひく。夢は失われつつある優雅さや愛や理想への渴望として表わされ、現実はその夢を容赦なくはぎ取ってしまう实际的で合理的な粗野な力として示される。この稿では、ごく初期的一幕劇5篇を収めた『アメリカン・ブルース』(*American Blues*)<sup>(1)</sup>から「切詰められた長い滞在、あるいは、気に入くない夕食」(“The Long Stay Cut Short, or, The Unsatisfactory Supper”)<sup>(2)</sup>を取り上げ、劇技法にも若干触れながら作品を検討してみよう。ところで、小品ながら、作品内容をそこに漂う抒情的な雰囲気を含めて述べるとなると意外に難しい。そこで、細部に目を凝らしながら解説していくという形でこの作品を読み解いていきたいと思う。

## 2

場所は、ボウマン夫妻 (Mr. and Mrs. Bowman) の、狩猟用に建てられた別荘の横庭とその中央にあるヴェランダ。ヴェランダの前の庭の一隅には大きなバラの茂みがあり、その「どこか不吉な様子をたたえた」バラは、夫妻の家に長期間滞在しているローズおばさん (Aunt Rose) の最終的な運命を象徴し

ている。時刻は、バラ色に彩られた日没時。ただ、嵐のやってきそうな気配があり、風が「猫の鳴き声のような声」をあげて絶えず吹いている。登場人物は、さきの夫妻——夫のアーチャー・リー (Archie Lee) と“ベビー・ドール” (“Baby Doll”) のあだ名で呼ばれる妻——とローズおばさんの三人である。ローズおばさんは、親戚のスージー (Susie) の家、さらにはジム (Jim) の家からも厄介払いされ、かくして姪にあたるボウマン夫人の家に転がりこみ、そのままずるずると居坐って現在に至っている。夫妻は、このことでいい加減嫌気がさしている。もし、おばさんが長びく病気になれば医療費はかさむだろうし、また滞在中に死ぬようなことになれば葬式代もばかにならない。葬式を質素にすませば、親戚どもは金はびた一文出さないくせに文句ばかりは言うだろう。期限のわからない今後の滞在のことを考えると、とりわけ夫のアーチャー・リーは気が気でなく、つい苛立ってしまう。

今日も、夫妻はローズおばさんの作った夕食の料理に不満を述べ合っている。野菜をじっくり煮るつもりが、ストーヴに火をつけるのをうっかり忘れてしまったのだ。静かな悲しみを基調とするこの作品に、こうした滑稽な場面がしばしば挿入され、作品にふくらみをもたせている。夕食へのあからさまな不平不満は、夫妻の積もり積もった憤懣をぶちまける格好のきっかけとなる。

夫妻のそんな思いをよそに、ローズおばさんは、明日の日曜日に部屋を飾るため、風に吹き散らされないうちにバラを摘もうと庭に出てくる。彼女の姿は、卜書に次のように述べられている——「彼女は85歳ぐらいの典型的な老嬢で、ひ弱そうな白髪の猿に似ている」<sup>(9)</sup>。彼女が、ボウマン家に来る前に滞在していたジムの家から追い出されたのは、ジムの女房の財布からお金を盗んだからというのだが、それはどうやら厄介払いするための口実にすぎなかったようだ。そのため、ボウマン家の世話になっている今、ボウマン夫人がハンドバックを放り出しておくと、ローズおばさんはそれを拾って夫人に「小銭を数えてごらんよ」という。追い出されないために細心の注意が必要なのだ。それでも、夫妻の不愛想な様子から、ローズおばさんは自分がこの家の荷厄介になっていることを十分感じとっている。瀬戸際に立たされている彼女の状況が、「猫の鳴き声のような音を立てている」風の音によって象徴され、しかもその

風の音は嵐の気配をはらんでいる。

庭でバラを数本摘んだローズおばさんは、ヴェランダにいるボウマン夫妻にそれを見せるが、彼等は目もくれない。夫妻は、滞在を切詰めてもらう話をおばさんに切り出そうと相談していたところなのだ。切り出そうとするボウマン夫人の話を、料理の失敗の言い訳をしながら、なんとかかわそうとするおばさんの姿は滑稽だがもの悲しい。夫にうながされ、意を決した夫人はおばさんに今後の計画はあるのかときく。それに対するローズおばさんの台詞は、寄る辺ない身の、神に委ねるしかない行く末を静かな諦めのうちに語るものだ。少し長いが、おばさんの台詞をト書を含めて引用しよう。

AUNT ROSE. Oh! Future! No-no, when an old maid gets to be nearly a hundred years old, the future don't seem to require much planning for, honey. Many's a time I've wondered but I've never doubted. ... (*Her voice dies out and there is a strain of music as she faces away from the porch.*) I'm not forgotten by Jesus! No, my Sweet Savior has not forgotten about me! The time isn't known to me or to you, Baby Doll, but it's known by Him and when it comes He will call me. A wind'll come down and lift me an' take me away! The way that it will the roses when they're like I am. ...<sup>(4)</sup>

(ローズおばさん　まあ、今後のだって。ないよ、ないね。老いた独身女が百近くまで生きれば、先行きの計画なんて必要あるもんかね。ふと思うことは何度もあったけれど、疑ってみたことは一度もない……(彼女の声が消える。ヴェランダから顔をそむけると音楽が流れる) わたしは、神さまに忘れられてはいない。そう、わたしの優しい神さまはわたしのことをほってはおかない。死ぬ時はわたしにもあんたにもわからないが、神さまだけはご存じだ。その時が来れば、神さまがお呼びになるよ。風が天から降り来て、わたしを乗せ、連れていってくれるのさ。バラがわたしのように萎えたら、そのバラを風が吹きさらっていくようにね……)

言い終るとヴェランダの方に向きなおるが、ト書はヴェランダを「法廷」(tribunal) と比喩的に表現している。追い出しの最終的な通告がローズおば

さんに言いわたされるのを、法廷に見立てたものである。ローズお婆さんは、なおも“抗弁”する。ヴェランダで頑固なまでに背を向けていたアーチャー・リーはしびれを切らし、いきなり向きを変えると次のように言い放つ——「親戚の誰とも気が合わなければ、国にはお婆さんのような人を引き取ってくれる施設がある<sup>(5)</sup>」と。これは、後年『欲望という名の電車』(*A Streetcar Named Desire*, 1947)で展開される、妹夫妻の家に転がりこんできたブランチ (Blanche DuBois) と彼女を追いつめるために元いた町への片道切符をつきつけるスタンレー (Stanley Kowalski) の関係に重なるものだ。親戚をたらいまわしにされる老嬢のことは、『ガラスの動物園』(*The Glass Menagerie*, 1945)で母親のアマンダ (Amanda Wingfield) が婚期を逸しかねない内気な娘ローラ (Laura) に言ってきかせる台詞のうちに出てくる。スタンレーとアーチャー・リーとの比較については、ロジャー・ボクシル (Roger Boxill) が、後者の台詞「ローズお婆さんを火葬にして、灰をコカ・コーラの瓶につめてやる<sup>(6)</sup>」に触れて、「スタンレー・コワルスキーのうちにさえ、これ以上酷い考えを見い出すのは難しいだろう<sup>(7)</sup>」と述べている。

アーチャー・リーは仕切り戸を荒々しく開けると部屋の中に飛びこみ、戸をびしゃりと閉める。閉められた戸をじっと見つめて立っているローズお婆さんのあたりには「青い夕闇」が落ち、今や嵐の気配が濃厚になっている。ボウマン夫人は、外に出されている椅子を急いで部屋の中に入れようと夫に手助けを求めるが、彼は姿を現わさない。夫人はお婆さんに中に入るように言うが、お婆さんはかすかに首を振るだけである。家の中に入った夫人に頼まれて、やっとアーチャー・リーが仕切り戸近くに出てくる。が、庭にじっと立ちつくしているお婆さんを見て「頑固なばあだ、動こうともしない<sup>(8)</sup>」とはき捨てるように言って、戸を再び閉めてみまう。庭にひとり取り残されたローズお婆さんは、うなり音を立てる強い風に耐えかねて膝をつき、摘んだバラも腕から落ちてしまう。象徴は明らかだ。強い風は非情な現実であり、腕から落ちるバラはローズお婆さんの夢や希望が地に落ちたことを示している。さらに、強い風のため、お婆さんの着ている灰色のキャラコの服が身体に巻きついて「がい骨のような輪郭<sup>(9)</sup>」を呈しているのは、お婆さんの死の近いことを暗示している。青い夕闇

が紫から黒に変わると、一層勢いを増した風は、唸り声をたてて、ローズおばさんをバラの茂みへと押しやってしまう。

### 3

以上みてきたように、ボウマン夫妻の家からも締め出され死に赴くローズおばさんの悲哀は、短い時間の推移のうちに、バラや風の象徴的な効果とも相まって、まるで一陣の風のように我々の心の中を吹きぬけて鮮やかな印象を残す。この作品を評するにあたり、小品ということもあり、人物像の彫りが浅く、そのため習作の域を出ていないというのも一面ではうなずける。しかし、この作品の巧みな“手品”が、劇を締めくくるト書のうちに仕掛けられているのを見逃すわけにはいかない。ローズおばさんの過去を比喩を交え凝縮した文章で述べるト書の部分を引用してみよう。

*……Nieces and nephews and cousins, like pages of an album, are rapidly turned through her mind, some of them loved as children but none of them really her children and all of them curiously unneedful of the devotion that she had offered so freely, as if she had always carried an armful of roses that no one had ever offered a vase to receive. ……*<sup>(4)</sup>

(……姪や甥やいとこ達が、アルバムの頁のように、素早くローズおばさんの心を横切っていく。彼等のうちのある者は、子供の頃おばさんに可愛がられたが、彼等のうち誰一人として本当には彼女の子供ではなかった。彼等はみんな、彼女があればほどまでに惜しみなく与えた献身を不思議にも必要としていなかった。まるで、彼女がいつも腕一杯にバラを運んできながら、それらをさす花瓶を誰一人差し出そうとはしなかったように。……)

ローズおばさんの死の暗示(「がい骨のような輪郭」)が観る者の視覚に訴えるのに対して、上に引用したト書の部分はテキストを読む者の想像に働きかけ

てくる。いってみれば「レーゼドラマ」の趣きがあるといっていいいほどだ。ローズお婆さんは、まず視覚の上で肉体的な外観をそがれ、ついで夢からも希望からも見放された彼女は、心に浮かぶ悲しみと孤独の像となる。そして、吹き散らされたバラの茂みへと押しやられ、舞台の上でのリアルな姿から遠ざかれば遠ざかるほど、その像はそれだけ普遍性を帯びた徴となって我々の心に焼きつけられる。多幕劇との比較でいえば、寄る辺ない者に対する作者の憐憫の情は、この徴を通してより直截に伝わってくるといえよう。

ウィリアムズは、多幕劇を書くにあたり、以前に書いた一幕劇を発展させたり、幾つかの一幕劇を結びつけたりするが、ロジャー・ボクシルも言うように「根は素描<sup>(1)</sup>の芸術家」である点を過不足なくみておく必要がある。ともあれ、上に引用したト書の部分が、対話と人物の行動のうちに発展させられる時、ウィリアムズは類似のテーマに基づき多幕劇へと向うことになる。

## 註

- (1) *American Blues* は、ここに取り上げた作品を含め、ウィリアムズのごく初期の一幕劇5篇を収め、Dramatists Play Service 社より発行されている。この本には発行年が示されていないが、作者が『ガラスの動物園』や『欲望という名の電車』で一躍劇壇に登場した後の1948年頃の発行と思われる。作者から版權を得た3篇の年が1948年と記されているからである。もとより、これら5篇の一幕劇は、この本の発行年よりもかなり前に書かれたものである。
- (2) テネシー・ウィリアムズの研究書や解説書のなかで、ここで取り上げた一幕劇を直接扱ったものは少ない。ウィリアムズの初期の一幕劇から後期の多幕劇までを概説したフェリシア・ロンドレの『テネシー・ウィリアムズ』(Felicia Hardison Londré, *Tennessee Williams*, Frederick Ungar, 1979) でも、「初期の一幕劇：領域の囲い」の章を設けているが、この作品には直接触れず、後年この作品と一幕劇「綿花を満載した27台の荷馬車」(“27 Wagons Full of Cotton”)に基づいて書かれた、作者の最初の映画台本『ベビー・ドール』(*Baby Doll*)を論じるなかで間接的に触れているにすぎない。約2頁にわたって直接この作品に触れたものに、ロジャー・ボクシルの『テネシー・ウィリアムズ論』(Roger Boxill, *Tennessee Williams*, Macmillan, 1987)がある。氏は、ウィリアムズの初期一幕劇を「色あせた佳人の素描」(“Sketches of the faded belle”)と「放浪者ほかの素描」(“Sketches of the Wanderer and Others”)の2群に分け、初期一幕劇をかなり詳細に論じている。なお、現代演劇研究会編『現代演劇』No.2(英潮社、昭和54年)が、テネシー・ウィリアムズ特集を組み、その中で黒川欣映氏がこの作品を簡明に解説している。

- (3) Tennessee Williams, "The Long Stay Cut Short, or, The Unsatisfactory Supper" in *American Blues* (Dramatists Play Service, Inc.) p. 35.
- (4) *Ibid.*, p. 40.
- (5) *Ibid.*, p. 41.
- (6) *Ibid.*, p. 39.
- (7) Roger Boxill, *Tennessee Williams* (Macmillan, 1987) p. 51.
- (8) Tennessee Williams, *op. cit.*, p. 42.
- (9) Tennessee Williams, *ibid.*, p. 42.
- (10) Tennessee Williams, *ibid.*, p. 42.
- (11) Roger Boxill, *op. cit.*, p. 39.